

城南総合研究所 調査報告書 No.17

3.11 小泉純一郎名誉所長が福島県で講演！ ～再生可能エネルギーを推進し、原発ゼロを目指す～

世界中に衝撃が走った東京電力福島第一原子力発電所の事故から4年を迎えた平成27年3月11日、会津電力株式会社が主催する講演会が福島県内で行われ、当研究所名誉所長の小泉純一郎元内閣総理大臣が講演されました。

当日は、悪天候にもかかわらず集まった1,000名を超える多くの福島県民を前に、小泉名誉所長が、原発即時ゼロと再生可能エネルギーの推進を訴えられました。

「日本の歩むべき道」

主催：会津電力株式会社 共催：一般社団法人 会津自然エネルギー機構

私は雪を見ると、敗戦からまだ半年も経っていない昭和21年のお正月に昭和天皇が詠まれた『降り積もる 深雪に耐えて 色変えぬ 松ぞ雄々しき 人もかくあれ』という和歌を思い出します。松は常緑樹であり、1年中どんな時も色を変えないように、『国民もどんな時も動じることなく、祖国復興のために頑張ってくれ』という想いを込めて詠まれた歌です。

今回の主催者である会津電力(株)も、地震、津波、そして原発事故が起きた大震災に、決してまけることなく、この大震災のピンチをチャンスに変えようという強い想いを持って立ち上げられました。佐藤社長は、故郷を壊してしまう恐れのある原発はやめて、自然界に無限にある、太陽光、水力、地熱等をこれからの福島に活かしていきたいと考えられ、いろいろと努力されております。今回はそんな会津電力(株)のさまざまなご活躍に感銘を受け、激励にやって参りました。



原発推進論者の3つの嘘

私は総理時代、「原発は安全である」、「原発コストは他の電源に比べて一番安い」、「原発はクリーンエネルギーだ」という原発推進論者たちが言っていた3つのことを信じ、資源が少ない日本には原発はなくてはならないものだと考え、原発を推進してきました。

しかし、4年前に原発事故が起き、この3つのことが間違っているのではないかと思うようになって、書物を読んだり、専門家の話を聞きながら、自分なりに調べました。その結果、原発推進論者たちが言ってきた3つのことが全部嘘だったということがわかりました。未だに政府はこの3つの嘘を言っていることに呆れてしまいます。

1つ目の嘘 – 「原発は安全である」 –

原発を導入してから約50年が経ちましたが、その間、1979年にアメリカのスリーマイル島で大事故が起き、その後、1986年に、旧ソ連のチェルノブイリでも大きな事故が起きました。未だに人が住めない程の2つの大きな事故に対して、日本では散々、日本の原発技術は世界に比べても高く安全であると言ってきました。

しかし、2011年3月11日、福島で原発事故が起きました。50年間に、人が住めなくなってしまう程の大きな事故を3回も起こした、そんな原発を本当に安全であると言えるでしょうか。絶対に事故が起こらない産業はないといわれますが、原発事故は一度起こると、ものすごく大きな事故になってしまい、取返しのつかないことになってしまいます。

昨年、まだ福島原発事故の原因究明がされていないにも関わらず、九州電力の川内原発の再稼働に対して、原子力規制委員会の委員長が「新しい審査基準には合格しましたが、安全とは申し上げられない」と言っています。政府はそんな危険な原発を再稼働させようとしているのです。

2つ目の嘘 – 「原発コストは他の電源に比べて一番安い」 –

政府は、未だに原発コストが一番安いと言っていますが、本当は原発のコストが一番高いのです。一番お金がかかるのが原発です。事故の被害者への賠償費用や廃炉費用等は電力会社だけでは負担しきれず、更に原発の周辺自治体にも設置をするために莫大なお金を支払っています。少し考えただけでも原発はコストが安いとは到底思えません。また、今福島原発事故処理に、1日6,000人～7,000人ぐらいの人が働いていますが、その人たちの防護服は使い回しすることができず、常に新しいものを使いながら作業を行っています。使い終わった防護服の処分方法も未だ決まっていません。このような防護服関連費用だけ考えても、原発コストが一番安いというのは嘘だということがわかります。

3つ目の嘘 – 「原発はクリーンエネルギー」 –

今原発事業を営む電力会社に融資する民間金融機関は1つありません。なぜなら、原発は不良債権事業だからです。原発は1度事故を起こしたら、取返しのつかないことになってしまっただけではなく、その後の核のゴミを処理する方法も場所も決まっていません。このように計画がしっかりとできていない事業に誰が融資するのでしょうか。

未だに世界中でも、核の最終処分場は完成していません。唯一完成に近い状態にあるのが、フィンランドにあるオンカロです。私もこのオンカロに視察に行ってきましたが、その時、担当者が、まだ岩盤に10万年後も水分が漏れる可能性がないかという検査が終わっていないと

言っていました。

また、放射能は色がなく、臭いもないのに、近づけば、必ず死んでしまう危険なものなので、千年、万年先の人たちもその場に近づかないようにしなければなりません。どうやったらその人たちに伝わるかがわかりません。私たちも、2,000年前のエジプトの文字が読めないように、千年、万年先の人たちが2015年の文字を読めるかわからないのです。

原発は核燃料だけ見れば、CO₂を出さないのかもしれませんが、原発産業全体を見れば、たくさんのCO₂を出しています。また、原発は熱を冷やすために、海水を多く取込みます。その時に微生物やプランクトンも同時に取込むため、周辺の生態系を変えてしまっています。熱を冷やすための冷却水も海に流すため、その周辺の海水温度が上昇し、生態系を壊してしまっています。これだけでも十分、原発は環境に優しいとは言えません。クリーンエネルギーというのは嘘なのです。



「汚染水はコントロールされている」と言っているが実際は全くコントロールされていない

私が総理の時に核のゴミを捨てる場所を決めなかったことは、総理の怠慢だと言われることがあります。最終処分場は、今現在も誰も決めることができません。昨年政府が決めるという申しましたが、未だに決まっていません。再稼働させると、現状よりも核のゴミはもっとも増えていきます。このような状態で、誰が手を挙げるのでしょうか。核のゴミをこれ以上増やさないように「原発を再稼働させない」と政府が言わない限り、国民は納得することはありません。

未だに最終処分場が1つもできておらず、4年経った今も、汚染水や除染のゴミの処分方法が決まっていないのに、「汚染水はコントロールされている」とどなたかが言っていました。全くコントロールされていないではありませんか。本当に呆れてしまいます。

「貿易赤字が国家の損失になる」というのは全くの嘘である

日本は資源が少ないため、石油を輸入しながら火力発電を行っていますが、このまま原発が止まったままだと、火力発電を増やさなければならず、そうすると、貿易赤字が増えていき、それが国家の損失になると言う経済界の人たちが言います。

貿易赤字が国家の損失になるのだとすれば、食料が輸入超過の国では、食料を輸入しすぎて、貿易赤字になったとしてもそれが国家の損失になると言えるのでしょうか。実際日本は、お金を出せば必要な物が買える豊かな国になりました。電気を発電する燃料が貿易赤字であるからという理由で、それが国家の損失と言うのはとんでもない話です。まあ、最近では、さすがにみんなわかったのか誰も言わなくなりましたが。

日本にはすごい技術力がある

太陽光は太陽が陰れば、発電できないし、風力は風が止まれば発電ができないと言われますが、最近の日本の蓄電技術の進歩はすごいものがあります。また、石炭火力も、最近ではCO₂を出さない技術が開発されてきています。昔から日本は困難があっても、必ずその困難を克服

できる国なのです。

また、清水建設株式会社の本社ビルを見学に行ったことがあるのですが、そこでは、LED照明と、窓ガラスから入ってくる太陽光をコンピュータ制御しながら上手く組み合わせて照明を使っていたり、オフィス内に輻射熱を利用した最新の空調技術を用いたりしています。

日本は今までもピンチをチャンスに変えてきた

歴史を振り返ると、今までも日本は、さまざまなピンチをチャンスに変えてきました。1973年には、石油ショックが起きました。しかし、この石油ショックがあったからこそ、日本は環境先進国になれたのです。今も世界中では、燃料電池車がしのぎを削っています。石油を減らし、エネルギーも良いものを使おうという風になってきています。そして、これからは、原発依存度を下げ、再生可能エネルギーでやっていきましょう。原発をゼロにすると、電気が足りなくなってしまうと言われてきましたが、日本は原発ゼロで1年半以上やっています。ドイツはゼロにするといいながら、まだ数基動いています。世界で原発を持っている国で、原発ゼロとは言わないけれども、1年半以上も原発ゼロでやっていけているのは日本だけなのです。日本も原発ゼロと言って再生可能エネルギーを推進していけば、すぐにヨーロッパ並みに普及していけると思います。

政治が原発ゼロに舵をきることが重要である

日本がこの大ピンチを乗り越えていくためには、今すぐ政治が、原発ゼロに舵をきる必要があります。政治が決断すれば、必ず企業も国民も協力します。原発ゼロの社会は「夢」のある壮大な事業であり、きっと、今よりも良い社会ができるはずです。何万年後もゴミを処理しなければいけない原発は今すぐやめて、自然界に無限にあるクリーンなエネルギーを使いながら、自然と共生できる社会を目指していきましょう。

クラーク博士の「少年よ大志を抱け」という有名な言葉がありますが、老人だって大志を抱いてもいいのです。会津電力(株)の佐藤社長が大志を抱いて電力会社を立ち上げたから、私も心から応援したいと思いました。原発ゼロは実現可能な夢のある事業です。「やればできる」は魔法の合言葉です。これからも明るい将来のために、原発ゼロの実現に向けて頑張っていきましょう。

<会津電力株式会社のご紹介>

会津電力株式会社は、原発に依存しない再生可能エネルギーによる社会づくりを目指して会津地域の有志が集い、2013年8月1日に設立されました。200年以上の歴史があり福島を代表する酒蔵、「彌右衛門」ブランドで全国に知られる大和川酒造の当主、佐藤彌右衛門氏が社長を務めています。佐藤社長は、「国や東京電力を非難するだけでなく、原発を見過ごしてきた責任として、太陽光、小水力、木質バイオマス、地熱、風力等の再生可能エネルギーを、自分たち自身で作り出そう」をモットーに、地域の資本と地域の資源を活用し、安全で持続可能な再生可能エネルギーの普及とその事業を行っています。